



「ワクワクする気持ち」を原動力に 母と娘で紡ぐ「第3の居場所」

トランポリンスタジオRAFiT・ユースセンタートリノスミカ運営

坂口京子さん/1969年生まれ。2005年に親子向けの子育てサークルを立ち上げ10年に、熊本市内にトランポリンスタジオ[RAFiT]をオープン。21年に移転し、複合施設としてオープン。

史乃さん/1997年生まれ。18歳でトランポリン指導員の資格を取得。母・京子さんと立ち上げた「3rd place Bird」の事業の一環として、24年から中高生が自由に集えるユースセンター「トリノスミカ」を運営している。

自身の悩みが活動のきっかけに

京子さん 私は、第2子の不妊に悩んでいた頃にトランポリンに出会いました。最初はうまく跳べなかったのが「できるようになる」喜びを感じました。運動を始めてすぐに第2子を妊娠。そして産後2カ月の頃、「自分の体を大切にしながら子育てを楽しむ」というコンセプトでトランポリンサークルを立ち上げました。当時は女性が体や健康について語ることが少ない時代でした。しかし、自分の経験から「お母さんが健康であること」の大切さを実感したため、産後の心身のケアなどもサークル活動に取り入れました。現在はトランポリン教室の運営に加え、人がふつと立ち寄れる「第3の居場所」づくりにも取り組んでいます。その中に、中高生対象のユースセンターも立ち上げました。

史乃さん ユースセンターを立ち上げたきっかけは、私自身、高校生の頃に不登校を経験したことがあるからです。その時、家と学校以外に、大人と話せる機会

小さくても心躍ることに挑戦して

京子さん 何か始めるときに大切なのは「とりあえずやってみること」「仲間を作ること」「継続すること」の3つです。例えば小さなことでもワクワクすることに挑戦することが大事です。今

があつたことで、視野が広がりとでも支えになりました。中高生が自由に過ごせる「第3の居場所」をつくりたいという思いをずっと胸に抱いていて、昨年ようやく実現できました。活動日は数人〜10人くらい集まり、性別や年齢に関係なく、ボードゲームや調理体験をしながら、お互いを理解し合っ



後は50代女性の異業種交流の場や、産前産後の悩みなどを共有できる新たなコミュニティをつくってきたいです。

史乃さん 私はいつも迷ったときに「自分がワクワクするのは？」と自分の気持ちと向き合います。今はユースセンターを続けながら、子どもたちの気持ちや課題に寄り添い、長期的にサポートを続けていければと思います。

取材市民編集員 徳永邦子さん

information 一步を踏み出した修了生も多数！ はあもにいウィメンズカレッジ

政策をはじめ、地域や職場での方針決定の場に参画し、自らの考えを発信できる女性人材の発掘・育成を目的とする「はあもにいウィメンズカレッジ」。今年度で12回目となり、さまざまな職種・年代の女性たちが受講しています。

本講座では各分野で活躍する講師陣を迎え、熊本市における男女共同参画の現状や課題、地域防災、女性の政治参画などについて分かりやすく学べます。これまでの修了生はそれぞれの地域や職場で学んだことを生かして、新たなつながりや取り組みを生み出しています。

次年度も13期ウィメンズカレッジを開催予定。自らの成長の場として、ぜひチェックしてみてください。

問い合わせ：熊本市男女共同参画センターはあもにい ☎096(345)2550



ご意見募集中 今回の特集「熊本ってホントに暮らしやすい？ いろんな立場の人の視点で考える地域の課題」について、あなたのご意見・ご感想をお聞かせください。宛先は巻末へ。

地域に愛される“交流イベント”を 16年間けん引

「四ッ角マーケット」実行委員会 代表

1983年生まれ。熊本市東区・鳥井原公園で年6回開催される地域交流イベント「四ッ角マーケット」を16年間支え、現在は実行委員会代表を務める。キッチンカーや水鉄砲イベントなど、世代や性別を問わず楽しめる企画を通じ、暮らしの延長線上で地域づくりに関わり続けている。



の良い循環が生まれていくのだと思います。また、女性が出産や育児、日々の家事などで自分の時間を取りにくい現状もあると思います。だからこそ、子育ては地域全体で支え合うべきだと感じますし、女性が地域に関わるのは自然なことだと思っています。

これから地域で何かを始めたいと考えている方には、「大げさに考えず、まずは仲間をつくってみて」と伝えたいです。私も「地域の暮らしを少しでも豊かにしたい」という思いで、これからも自分なりの形で関わり続けていきたいです。

取材：市民編集員 高智穂太郎さん



「その人らしさ」を生かして楽しむ

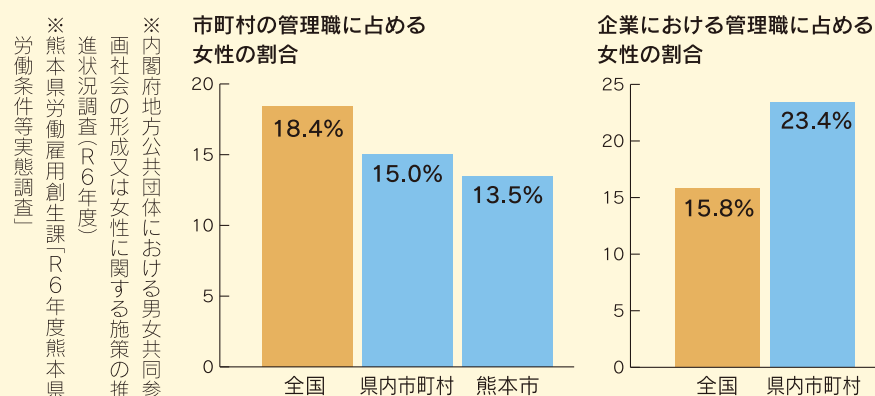
「四ッ角マーケット」は、地域にある設計事務所の「まち全体を上質な風景にしたい」という思いから始まったイベントです。当時の自治会長だった私の父も関わり、地域に根づく活動としてスタートしました。私は途中から実行委員として参加し、今では16年と一番長く関わっていることから代表を務めています。親子が楽しめるイベントやマルシェを通して、みんなの交流の場として定着しています。

女性の力が鍵を握る

データで見る
熊本の現状と未来

熊本県内の議会議員や管理職を担う女性の割合はいずれも全国平均を下回っています。政策決定の場に女性の意見が十分に反映される場が少ないというのが大きな問題です。一方で企業における女性管理職は、係長級以上の割合が23.4%と全国平均の15.8%を大きく上回っています。今後は自治会役員など、地域においても女性の力を積極的に生かしていく必要があります。

熊本県が令和4年度に行った調査では、県外に転出した女性の多くが熊本に愛着を持つっており熊本に戻ることに興味関心があるものの、地元「男は仕事、女は家庭」といった意識が根強く残っていると感じている人も多く、それが熊本のネガティブなイメージにつながっていました。県民の8割以上が「政策企画立案や方針決定の場に女性の参画を望んでいる」という調査結果もある。



り、女性の力を存分に生かしていくこそが、これからの熊本の発展の鍵を握るといっていいでしょう。



話を聞いた人

熊本県立大学総合管理学部 公共専攻
大学院アドミニストレーション研究科 研究科長・教授
澤田 道夫さん